

誰に聞かれたわけでもなく、特別人生を振り返る年でもないけれど、時折ネッシーのように脳内湖面に顔を出す「私の驚愕ベスト・スリー」を以下に発表しようと思う。

まずはマリー・アントワネット。「ベルサイユのばら」が大ヒットした池田理代子氏プロデュースの展覧会でのこと。「働かない貴族の手とはこういうものだ」という見せしめの手型が展示してあった。それを見た瞬間、私の目は見開かれ一気に血の気が引いた。そして反射的に自分の手を目の前に取り出してしげしげと眺めた数秒後、ホッと力が抜けた。「ああ、よかった。手がついている」マリー・アントワネットの指先の方が細く美しかったが、夏でもハンドクリームを使う私の手と色合い・大きさがほぼ同じだった。それから数年後の2010年、山梨の歴史研究家・矢崎勝巳氏が、彼女の肖像画の目の横幅を手掛かりに当時の本のサイズ、上腕骨の長さを割り出し、上腕骨と身長の高さの相関を表した「ピアソン式」に当てはめ、彼女の身長を154cmと割り出して発表した。（因みに当時の女性の平均身長は152cmで、モナ・リザの身長も152cmと推定されている）その記事を見た時、私は納得した。私の身長はマリー・アントワネットと同じ。逆に言えば上腕の長さも同じということだ。手の大きさが同じであっても不思議はない。「働かない手」とは言うけれど、働けば「ごつく」なっても大きさまで変わるとは思えないのだけれど。私は明るい気質を持ちながらも政治に翻弄されたのが残念なマリー・アントワネットが好きであるが、猶更身近になった。

次はカウンター・テナー彌勒忠史氏のコンサート。毎年クリスマスは心静かに過ごすのをモットーにしている私は、2008年国立博物館企画の「待降節」ラウンジコンサートを見つけた。パンフレットに歌手とピアニストの写真が載っていたが、私は「どうせこの写真と同じ人は出てくるわけがない」と思っていた。何故なら出演者の掲載写真は同じものを延々と使うから、ひどいときには経年劣化...いや人生の味が出て本人と見分けがつかないくらい変貌していることもあるからだ。それに加えて自由席のために開演前に並んでいると、列前方に彌勒氏の詳細をご存知の方がいらしてお連れの方と声高に話していらっしやる。「まいったなあ」何の先入観もなくご当人を目にした新鮮な印象を受け取りたいのに。致し方ない。そしてコンサートが始まると「やっぱり」写真は短髪、目の前の方はセミロング。そこで歌の第一声を聴いたとき、私の頭の中で白っぽい石造りの3階建ての建物がガラガラと崩れ落ちた。瞬間衝撃。カウンター・テナーへの既成概念が崩れた瞬間だった。けれど張りのある安定性のある歌声に魅力を感じた。やはり宗教曲にふさわしい。戯れに同等の声を探してみてもロシアの女性歌手が一人見つかった。けれど彼の場合、日本人の持つ哀愁感が功を奏する。

さて3番目は漱石研究第一人者と言われている小森陽一教授の『吾輩は猫である』講座を聴く機会があった時。途中回からだったのだが、いきなり当世話題の原子力問題。漱石の政治性もさることながら「明治」という激動の時代に前向きに生きた人間のエネルギーに驚愕した。明治時代に連れて行かれたというよりも、その時代の穴に一気に突き落とされた感覚の衝撃は大きかった。まるでタイムマシンに乗ってエアポケットを通過したみたい。実際「古い人間になってしまわないかしら」という心配通り、現代感覚に立ち戻るのに少し苦労した。何とか平成まで戻ってこられてよかった。

以上、実は楽しい思い出でもある「私の驚愕ベスト・スリー」でした。(2012.10.13)